

# 歴史人口学からみた生と死 二



鬼頭 宏

## 三、平均余命

### (一)

ある年齢に達した人があと何年生存できるかを示す平均年数を平均余命という。とくに出生時（零歳）平均余命を平均寿命ともいい、人々の一生を、長さにおいても生活水準においても、端的、総合的に物語る数値である。

最新の一九七九年簡易生命表では、日本人の出生時平均余命は男七三・四六年、女七八・八九年となっている。男女ともスウェーデンと一、二位を競い、わが国は世界の中で最も長寿の国のひとつになっている。聖書（創生記第六章）は、ヤハウェ神は人間の寿命を百二十歳に定めたと書いている。事実、ヒトの寿命の上限はそれに近いということであるから、日本人の寿命はまだまだ延びる可能性をもっているのだろう。

日本人の過去の寿命はどうだったろうか。「人生僅か五十年」とは人生の短かいことの譬えであるが、出生時平均余命が五十を

超えたのはわずか三十年前のことである。一九五〇年に公表された第八回生命表（一九四七年調査）で、男五〇・〇六年、女五三・九八年と、男女とも初めて五十代に乗った。第一回生命表（一八九一―一八八八年調査、松浦公一による改作値）では、男三七・一年、女三九・四年でしかなかった（松浦・一九五八）。したがって百年足らずの間に、日本人の一生はなんと二倍の長さになったわけで、人口史上、他に例をみない高成長ぶりだった。

## (11)

江戸時代に遡って全国規模の生命表を得ることはできないが、宗門改帳や寺院の過去帳を利用すれば、村や町単位の小集団の平均余命を知ることができる。表1に示したものがそれで、いずれも各期間の死亡コーホート、あるいは出生コーホート（同じ期間に死亡または生まれた人口集団）にかんして、宗門改帳から得られた年齢別死亡数をもとに年齢別死亡率、生存率を求めて算出された。宗門改帳には数え年二歳から登録されるのが普通なので、この数値は数え年二歳時の平均余命である（満年齢で言えばほぼ〇・五歳にあたる）。

出生時平均余命を求めるには、何らかの方法で数え年一歳時の乳児死亡を補正して推計しなくてはならない。より厳密な方法と

してはモデル生命表の適用による方法と経験的な曲線あてはめによる方法がある。表中、藤戸村と西方村の平均余命は前者の方法で得られており、例えば藤戸村の出生時平均余命は男四一・一年、女四四・九年と七年ほど短くなってしまう。曲線あてはめによる推計としては信濃国虎岩村の例がある（小林・一九五六）。ここでは一八一―一五年の死亡コーホートから得られた出生時余命は、男三六・八年、女三六・五年で満一歳の余命より七―十年も短い。

簡便な方法として乳児死亡率を仮定して出生時余命を推計することもできる。数え年一歳の死亡率を、宗門改帳にてこない真の出生数の一〇%および二〇%と仮定しよう。すると、例えば湯舟沢村（一六七五―一七四〇年）の男で三四・三および三〇・一、同村（一七四一―一九六六）の男で三九・四および三五・〇が出生時平均余命である。ここでも二歳の余命より三―八年は短いことがわかる。

表1にもどろう。横内村、湯舟沢村、飯沼村をみると、十七世紀末以後幕末までの二世紀間に、平均余命は相当大きな伸びをみせている。おそらく七年以上になるだろう。出生時平均余命に換算すると、十七世紀には二十代後半ないし三十歳そこそこだったものが、十八世紀には三十代なかば、そして十九世紀には三十代

表1 江戸時代の平均余命（数え年2歳時）

地域（国）	年代	男	女	出所
横内村（信濃）	1671-1775	30.6	31.7	}（速水、1973）
	1671-1725*	36.8	29.0	
	1726-1775*	42.7	44.0	
湯舟沢村（信濃）	1675-1740	37.1	37.6	}（鬼頭、1974）
	1741-1796	43.2	42.0	
飯沼村（美濃）	1711-1781*	41.8	39.7	}（速水、1970）
	1712-1750	37.4	37.4	
	1751-1800	45.6	43.8	
	1826-1867	44.4	44.9	
浅草中村（美濃）	1717-1830	46.1	50.8	（Smith、1977）
西條村（美濃）	1773-1800*	34.6	34.4	（速水、1973）
西方村（三河）	1782-1796**	44.0	59.2	}（Hanley & Yamamura, 1977）
藤戸村（備中）	1800-1810** 1825-1830	48.8	51.5	
神戸新田（尾張）	1838-1869	32.0	30.0	（速水、1967）
尾・鷺組（紀伊）	1868・1869	38.5	35.5	（速水、1969）
高山貳之町（飛騨）	1773-1870	37.9	36.2	}（佐々木、1969）
	1806-1810	39.2	39.6	
	1811-1815	49.5	42.8	
	1831-1835	43.1	41.7	
	1836-1840	38.8	39.8	
	1841-1845	37.1	32.9	

\* 出生コーホート（無印は死亡コーホート）

\*\* 出生コーホート、Coal-Demenyモデル生命表により補正。

後半になって明治中期の水準につながったものと思われる。

表1からは平均余命の地域差が大きかったこともわかる。新田村落である神戸新田、漁村を含む尾鷲組十二ヶ村は、同期の他の地域より短命である。飛驒の一寺院の過去帳から得られた、十八世紀末から十九世紀前半にかけての平均死亡年齢も三十二歳程度だったから、このような村も例外ではなかったのかも知れない。母集団の規模が小さいこと、年齢構成の相違が調整（標準化）されていないこと、また年代のとり方が一定でないことなど統計上の原因もあるだろう。しかしそれだけではなく、現代に比べて江戸時代には、人口集団を取巻く自然的、社会的な相違が直接、平均余命に影響を及ぼして、地域差を際立たせていたと考えられる。

高山武之町はこの表1における、唯一の都市の例である。幕末一世紀間の平均余命（男三七・九年、女三六・二年）は極端に短いとは言えないが、条件の良い農村とは七、八年の開きがある。

高山では出生地別の余命が計算されていて、市内出生人口については男三六・三年、女三四・五年、外部（農村）からの移入人口については男三九・九年、女三八・六年となっている。明らかに移入人口の余命の方が長く、その差は三、四年に達している。このことから江戸時代の都市の平均余命は、一般に農村のそれよりも短かったと言えよう。

階層間ないし身分間の格差はまだ十分に研究されていないが、出産率などに明瞭な相違が認められているので、平均余命についても当然、同様のことが考えられる。武士階級については、「寛政重修諸家譜」に基いて計算された旗本の平均死亡年齢を紹介しよう（ヤママラ・一九七六）。旗本を出生年代別に分けると、一五六一―一九〇年四二・三歳、一五九一―一六二〇年四七・八歳、一六二一―一五〇年五二・八歳、一六五一―一八〇年五一・七歳、一六八一―一七一〇年五一・三歳であった。十六世紀に生まれた者と十七世紀に生まれた者では十歳程度の開きがあり、この間に旗本の平均余命は着実に延びることがわかる。しかし、江戸時代後半にどうなったか知ることができないのは残念だが、おそらく頭打ちだったのではなからうか。

また死亡年不明の者が一割前後あるので、これをすべて幼児死亡とみなすと、死亡年齢は五歳程度は割引かなければならなくなる。同時代の庶民人口よりはるかに長命だったろうが、余命の延びは十七世紀にとまり、後れて余命を延ばしてきた庶民人口との差は十八世紀以降、縮まる方向にあったと考えられる。

五代將軍綱吉に側用人として仕えた柳沢吉保家は、明治に至るまで七代にわたって一二〇人の子孫を出したが、その平均死亡年齢は男二二・〇歳、女一五・三歳でしかなかったという、信じら

れないような調査結果もある（松田・一九七八）。大名と言えども長命とはかぎらないという例である。

### (三)

全国人口が停滞していた陰で、中央日本の農村の平均余命は最大限五〇％近くも伸延したと考えられるのだが、その原因は何にあるのだろうか。

明治以後の余命の延びが医療と医薬の進歩に多くを負っているのに対して、江戸時代の場合、通俗的衛生知識の普及、家庭用置き薬、漢方ならびに蘭方医の役割などは無視できないけれど、幕末に種痘が実践されるまでは流行病に対する有効な予防法や治療法が役立っていたとは考えられない。

それよりも、平凡で日常的な生活水準の向上があったことこそ重要でなかったらうか。江戸時代は、現代生活における日本の伝統が庶民に普及し、さらに向上した時代だった。

農民住居における掘立屋から礎石屋への転換、畳の敷きつめの普及はより快適な住環境をもたらした。近世以前に農業労働の底辺を支えていた下人・被官たちの地位向上もあった。かれらは木屋の土間の片隅や台所、馬屋で就寝していたのである。

衣料の面では木綿の普及があった。棉が三河で栽培されるよう

になったのは十六世紀初めで、十七世紀のあいだに東海、近畿、瀬戸内海沿岸地方で商品作物として重要な座を占めるようになった。その結果、誰もが木綿の衣服を着ることができるようになり、庶民衣料の中心は麻から木綿へ代わった。この移り変わりをもたらした生活の変化を、柳田国男は『木綿以前の事』で活写している。健康の面でも、丈夫で頻繁な洗濯に耐え、保温や吸湿性に富む木綿は、清潔と快適な生活をもたらしてくれた。

近世にはいつてから、精力的にすすめられた新田開発と集約的農業の成立によって、農業生産は拡大した。食生活も当然向上したと考えられる。十六世紀に、一日二食制から朝昼夕の三食制が一般化したほか、食品の種類が増加や質の向上がみられたからである。流通の発展も寄与したであろう。和食文化の成立は、庶民のすべてが米を常食とすることができたわけではないとしても、豊かな食糧余剰の成立を物語っている。

もつとも一人当たり食糧摂取量がどの程度かということになるとわからない事が多い。茶の湯の懐石料理の献立から、江戸時代の一人一日当たり摂取熱量を一四〇〇〜一七〇〇カロリーとする推計がある（堀津・沢田一九七八）。この水準は現代日本人の所要熱量はもとより、最貧諸国のそれをも下回る。江戸時代庶民の身長は現代より十センチ・メートル以上低く、慢性栄養失調の状態に

あったと言われる（立川、一九七九）。しかし同じ手法で推計された室町時代後半の摂取熱量よりは多いので、労働をより多く投下する農業の成立も考慮すると、一般に栄養水準は上昇したことが窺われる。

衣食住に限らず、入浴、育児法など幅広い生活の諸領域で、よりよく生きようと志向する態度が江戸時代に生まれたと言えないだろうか。

(四)

延びたといっても江戸時代の人々の一生は現代の半分でしかなかった。違いは長さだけではない。地域差や身分・階層による格差も大きかった。男女間にも、年齢別死亡率の様相にも現代との相違が大きい。

湯舟沢村の年齢別平均余命と生存数曲線を見てみよう（表2、図1）。最も印象的なことは生存数が二歳から六歳に大きく減少しているのに対し、平均余命の方は大幅に延びていることである。ここから、平均余命の長短が特に乳幼児死亡の多少に強く影響を受けていることがわかるだろう。またI期とII期の比較から六歳以後の余命にあまり差がないことも重要である。平均余命が短いということは、すべての人々が短命であることを必ずしも意

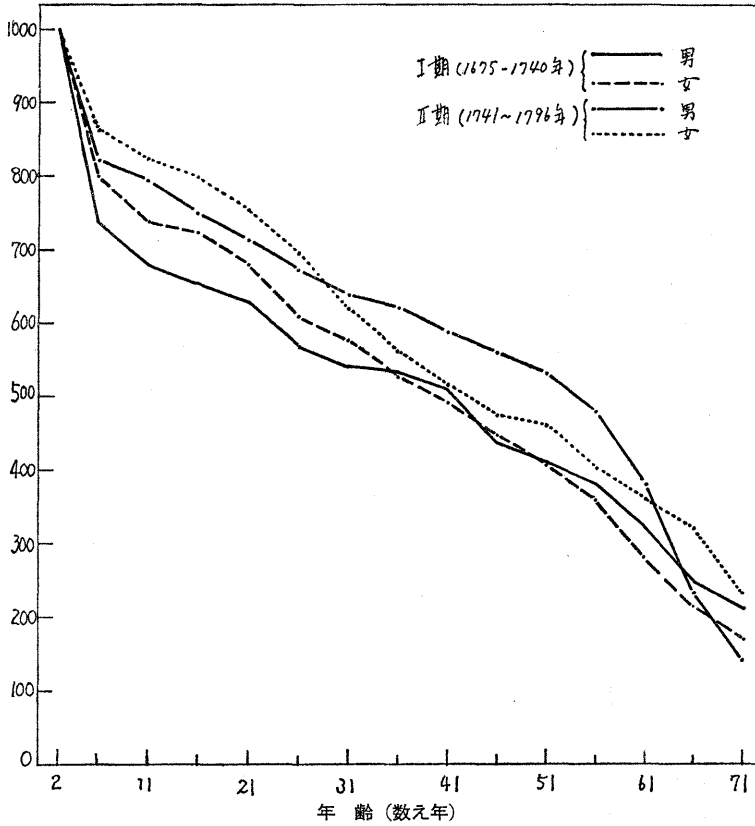
表2 年齢別平均余命（湯舟沢村）

年 齢	I 期 (1675~1740)		II 期 (1741~1796)	
	男子	女子	男子	女子
2	37.1	37.6	43.2	42.0
3	39.6	39.7	45.2	43.7
4	44.3	42.2	47.3	43.9
5	46.0	42.8	47.6	44.8
6	45.8	42.6	48.2	44.6
11	44.1	41.0	45.1	41.7
21	37.7	34.1	39.5	34.8
31	33.1	29.3	33.4	31.3
41	24.7	23.5	25.9	26.6
51	19.8	17.4	18.1	19.5
61	13.6	12.5	13.0	13.5

注 5歳までは各歳ごとに、6歳以上は5歳階級ごとに算出して抄出した

図 1 生存数曲線 (信濃・湯舟沢村)

生存数 (2歳=1000)



味しない。死亡率の高い、危険な時期を無事に過ぎると、平均余命はかなり長くなるのである。このことはさきに推計したように、出生時余命と二歳時余命の大きな開きにも示されていた。

五歳以下の死亡率が高かったために、江戸時代の最長平均余命は六歳以後にあらわれた。例えば信州横内村（一七二六—一七六六）の最長余命は、男が八および九歳の五〇・一年、女が六歳の四九・三年であったから、その年齢に達すれば六十歳頃まで生きることが約束されたわけである。

きわめて高い乳幼児死亡率は前工業化社会の人口の特徴である。懐妊書上帳という妊婦の調査記録から筆者が計算したところ、文化・文政期の東北南部の一農村では、出生千に対し一八〇に相当する乳児死亡があった（鬼頭・一九七六）。飛騨大野郡の寺院過去帳によると、幕末

の乳児死亡率は三〇〇パー・ミルにも達していた(須田・一九七二)。

五歳以下の幼児死亡については宗門改帳から知ることができ、それによると十七世紀末から十八世紀にかけては、二歳で登録された幼児のうち二〇〜三〇%は六歳までに死亡している。このような状況では、出生児の半分は十歳まで生存できないことになってしまふ。

仮に五歳以下の死亡率を半減させると、二歳の余命は少くとも五歳は延びることが計算から導かれるから、江戸時代の平均余命の延びの大部分が低年齢層における死亡率の改善によってもたらされたとみてよいだろう。事実余命の延びが認められる地域ではどこでも、幼児死亡率に大幅な改善がみられた。その顕著な例として横内村をとりあげてみよう(速水・一九七三)。ここでは一六七一〜一七〇〇年に出生した男子の三五%が五歳以下で死亡したが、一七五一〜七五年では一六%、そして一七七六〜一八〇〇年では八%へと大きく低下したのである。

低年齢層の死亡率が高いことは庶民人口に限られない。最高の生活水準を享受したはずの將軍家の子どもたちも例外ではなかった。

十一代將軍家斉(一七八七〜一八三七)は十七人の正妻と側室

から、二人の流・死産のほか、五三人の子を得た。しかし成人した子は少ない。一五人(出生児の二八%)は一歳未満で死亡し、さらに一七人が一五歳未満で死亡したので、十五歳以上まで成長した子はわずか二人(四〇%)にすぎなかった。將軍家といえども幼ない子の命を守ることが、いかに困難だったかを物語っている。

当時、小児の命を多く奪った病気のうちでもっとも恐れられていたのは、痘瘡と麻疹だという(立川・一九七九)。それに「虫」とか「疳」と呼ばれていた、消化不良、自家中毒症、小児結核、小児脚気、夜驚症などからなるさまざまな小児病、赤痢、コレラ、腸チフスなどの「痢病」がこわい存在だった。

病気のほか、栄養条件や生活環境、育児習慣にも重大な問題があったはずである。とくに統計には現われない、隠れた死亡原因として人口制限の手段となっていた間引の風習を指摘しなければならぬだろう。

平均余命を検討して考えさせられる第二の点は、現代と異なっており、しばしば男の方が長生きだったことである。そうでなくても男女差は小さく、平均余命は接近していた。この現象も低開発諸国にも見られる、前工業化社会の特徴である。平均余命における女性上位は工業化の賜物だった。



その原因を解く鍵は生存数曲線（とくにⅡ期）に隠されている。十代まで女子の生存数曲線が男子より高いのは、女の幼児死亡率が低いからである。しかし二十歳を過ぎると傾斜を強めて、三十歳頃には男よりも生存数が少くなってしまう。男女の生存数曲線の乖離は四十代半ばまでひろがるが、その後縮少して再び逆転する。平均余命も四十一歳以後男を上回る。

いうまでもなく、これは二十代から四十代前半にかけて女子の死亡率が高まったことの結果である。そしてこの年代が、ちょうど出産年代にあたってのことから、妊娠から出産に至る期間の死亡が多かったことを推測させる。適切な医療と母体保護思想の欠如、そして不確かな避妊がもたらす墮胎の慣習が、出産を非常に危険なものとしていたのである。現代よりも出産回数のはるかに多い江戸時代には、それだけ女性は命を失う危険にさらされていた。女子の二十代から四十代の死亡率を男と同等の水準まで引き下げてみると、女子の平均余命はあと四、五年は長くなる計算である（湯舟沢村Ⅱ期の場合）。

### (五)

平均余命の短かったことが、他の人口学的特徴とどのような関連をもっていたか、ここで触れておこう。

これまで見てきたように、非常に高い乳幼児死亡率が短命に結びついていた。高い死亡率をカバーして一社会の人口を維持するには、同様に高い出生率を必要とする。江戸時代後半の全国人口の普通出生率と普通死亡率は、おそらくともに三〇パー・ミルを越えて四〇パー・ミルに近かったことだろう。

これを個別家族のレベルで言えば、多くの子をもったことを意味する。出生児の半分は結婚年齢に到達するまでに夭折してしまうから、家を維持するためには、ゆとりを持って多目に子を生んでおかなければならなかった。二十歳前後で結婚し五十歳まで継続した夫婦は、ふつう五、六人の子を出産していた。

高出生率・高死亡率は、人口の年齢構成にも現代とは異なった様相をもたらした。年齢構成を示す図である人口ピラミッドは、低年齢層が大きくひろがる富士山型を呈する。都市と農村、人口の増加期と減少期では当然異なるが、人口移動の少ない農村では一般に、十五歳以下の年少人口は三〇%以上、十六・六十五歳の青壮年人口が六〇%以上、六十六歳以上の老年人口は数%どまりだった。

短命な社会は、多くの幼ない者たちの犠牲の上に成り立つ社会である。子どもはいともはかなく、危い存在であった。そこに、おそらく子どもに対する矛盾する感情と価値観が生まれる原因が

あった。子は宝として大切にされる反面、意志のないものとして命さえもおとなの側の都合にしたがって、与えられもし、奪われもした。

「七歳までは神のうち」という俚諺がある。生存の可能性が不確かであるうちは人間として承認しないことは、夭折を嘆き悲しむ感情を緩和する点でも、間引を行なうことによって残余の人々の生存を安全にする上でも、ある種の合理性を有している。発達心理学からの解釈とは別に、このようにその背景の人口学的な説明が成立ちうる。柳田国男は「元服前の人間が、一つの物の生命と成り行く一つの階段がある」として、もっとも重要なものが数え年七歳であると述べている(柳田・一九六九)。七歳という年齢は、平均すると満五歳半で迎えるわけで、最も死亡する危険の多い、人生の最初の五年を過ぎた段階である。そのような状況だったからこそ、子の発達段階にもなう通過儀礼の重々しい意味が理解されるのである。その歳までの生存と成長が祝われるとともに、儀式をくぐることによって人間としての存在を共同体に承認されるという二重の意味が、そこにあつたのである。

(上智大学)

〔参考文献〕

Hanley, S.B. and Yamaura, K. 1977 *Economic and Demographic Change in Preindustrial Japan, 1600-1868*, Princeton University Press.

速水融 一九六七 「近世後期尾張一農村の人口統計続篇」『三田学会雑誌』六〇巻一〇号。

速水融 一九六九 「紀州尾鷲組の人口趨勢——増減書上帳の検討を通じて——」徳川林政史研究所『研究紀要』昭和四十三年度。

速水融 一九七一 「東濃一山村の人口統計——恵那郡飯沼村正徳二年——慶応四年——」徳川林政史研究所『研究紀要』昭和四十五年度。

速水融 一九七三 『近世農村の歴史人口学的研究』東洋経済新報社。

速水融 一九七三 「濃州西条村の人口資料——安永二年——明治二年——」徳川林政史研究所『研究紀要』昭和四十七年度。

堀津圭佑・沢田満喜 一九七八 『日本人の生存年数に関する研究』秋山書店。

鬼頭宏 一九七四 「木曾湯舟沢村の人口統計——一六七五—一七九六年」『三田学会雑誌』六七巻五号。

鬼頭宏 一九七六 「徳川時代農村の乳児死亡——懐妊書上帳の統計的研究——」『三田学会雑誌』六九卷八号。

小林和正 一九五六 「江戸時代農村住民の生命表」『人口問題研究』六五号。

前川久太郎 一九七六 「酒湯記録より見た痘瘡・麻疹・水痘の大奥への伝播」『日本医史学研究』二二卷二号。

松田武 一九七八 「一大名家の系図過去帳よりの統計的観察」『医学史研究』四九号。

松浦公一 一九五八 「日本人の国調前生命表（統計局第一―三回）の改作」『医学研究』二八卷七号。

佐々木陽一郎 一九六九 「飛騨国高山の人口研究——人口推移と自然的要因——」『社会経済史学会編『経済史における人口』慶応通信。

佐々木陽一郎 一九七七 「江戸時代都市人口維持能力について」『社会経済史学会編『新しい江戸時代史像を求めて——その社会経済史的接近——』東洋経済新報社。

Smith, T.C. 1977 *Nakahara, Family Farming and Population in a Japanese Village, 1717-1830*, Stanford University Press.

須田圭三 一九七三 『飛騨O寺院過去帳の研究』私家版。

立川昭二 一九七九 『近世病草紙』平凡社。

ヤマムラ・コウゾウ 一九七六 『日本経済史の新しい方法』ミネルヴァ書房。

柳田国男 一九六九 「小児生存権の歴史」『定本柳田国男集』第一五卷 筑摩書房。

